

「競争から共生の日本へ—広尾の狸からの警鐘」 吉田總一郎著

かんき出版 ISBN987-4-7612-6868-8 2012年10月16日第1刷発行

”奪い合いから分かち合いへ“

生態系の変化、自然と人、人人の関係の希薄化に警鐘！

1988年、著者が発表した「地域地方の三日月湖化論は、日経産業新聞懸賞論文に入賞。その提言は今、グローバル経済の中で、「日本の三日月湖化」という形で実証。「再蛇行化」の思想が求められている。(オビ)

自然からかけ離れた今の大都市の生活基盤は、日本の産業構造もふくめて見直されるべきだ」という吉田氏の主張には、私も同感だ。日本の環境の将来を真剣に考えている人たちに、是非読んでもらいたい。

—C・W ニ

コル

(内表紙)

目次

- 第1章 広尾の狸春の小川第
- 第2章 狸が訴えたかったこと
- 第3章 三日月湖化とグローバル経済
- 第4章 コンクリート基質と自然基質
- 第5章 水生生物と人間
- 第6章 河川の直線化とコンクリート基質
- 第7章 都市の呼吸とメタボリズム
- 第8章 涙の数だけ

付章 バイオディーゼル論文について

内容

日本の空洞化が叫ばれる中、この状況をかなり前から予見し、これまでの輸出に偏重した産業のあり方とその為に地方の貴重な人的資源、自然資源をはじめとする多くの固有の資源を枯渇させてきたことへの反省と今後の日本の成長戦略と成熟国家としての在り方を詳述する中で、地方

の三日月湖化、日本のグローバル化経済の中での三日月湖化を、著者が1980年代から主張し、警鐘してきた「三日月湖化論」により展開し、自然な川、河川の直線化、三日月湖化、再蛇行化になぞらえて、日本人の環境観まで敷衍し、日本と日本人のあり方を述べている。

また、著者の東京の広尾の自宅玄関での野生の狸との邂逅への一極集中と日本人本来の自然との共生観、自然との距離の取り方を忘れた生活に対して、「広尾の狸からの警鐘」として、最近起きている自然災害と人の関係は今、われわれがおいてきた20世紀の忘れ物としてあらためて、現代人として考えさせられることのひとつである。

全編を通じて、情報過多の時代にあって、ポピュリズムに流されずに、「滯筋（みおすじ）を外さず」に思考する習慣や生き方の大切さを示唆する著書である。

抜粋、「おわりに」から

久しく、「いつか書いてみたい本」のスタイルがあった。
小説や随筆など文芸ではなく、学術論文でもなく、もっと欲張りな。
経営者だから、身を置く業界に精通し、経営能力を競い、
政治家だから、調整能力や弁舌に長け、
学者だから、専門分野に深く。
そうではなく、
人間は、自由に、さまざまな領域に出入りできるものだ。
自分の中にもう一人の人間が生き、
自分の外にもう一人の人間を生かし、
なおかつ、自分は自分らしく生きる。
いろんな自分がいろんな価値を手繰り寄せ、
一人の自分が単独の領域に求めたら見えてこないものが、
多くの領域に通底する新たな価値が意味をもって顕われてくる。
いつもどの自分に求めようとしているのか考えて生きていたい。
本書は、狸の手引きでウスバコカゲロウとも仲良くなったり、
一〇〇余年前の渋谷の農村の原風景に出くわしたり、
執筆中に東北に大震災が起きたり、
都市の「ドライアイランド現象」などという言葉をつくったり、
川にたとえれば、滯筋はとめどなく揺れ動いた。
でも、こんなスタイルが、望んでいたものにかぎりなく近い。
不揃いな文章の切っぺんから少しでもインスパイアするものがあることを。

平成24年10月16日

吉田總一郎